

追放者の機略 下

ヴァルデマールの絆

マーセデス・ラッキー

訳／澤田澄江

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の ▶ (次ページ) をクリックするか、キーボード上の ▶ キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

Exile's Valor
A Novel of Valdemar

by

Mercedes R. Lackey

Exile's Valor ©2003 by Mercedes R. Lackey
Japanese translation right arranged with the author,
c/o BAROR INTERNATIONAL, INC.,
Armonk, New York, U.S.A.
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.
Japanese edition ©2014 by Chuokoron-Shinsha, Inc.

挿絵 竹井



目 次

| | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| 第十六章 | 第十五章 | 第十四章 | 第十三章 | 第十二章 | 第十一章 |
| 93 | 77 | 61 | 43 | 26 | 9 |

| | | | | | |
|--------|-------|------|------|------|------|
| 訳者あとがき | 第二十一章 | 第二十章 | 第十九章 | 第十八章 | 第十七章 |
| 214 | 195 | 177 | 156 | 137 | 115 |

タラミール

セレネイ

キャラス王子

登場人物
紹介



ナリス

ミステ

ケレン

イルサ

アルベリッヒ

追放者の機略 下

ヴァルデマールの絆



第十一章

オーサレン卿との面会を終えてから数日のあいだ、セレネイは心の奥で何かがざわめくを感じ、落ち着かない、ひどく浮き足だった気分を味わっていた。おそらく、そういう季節なのだろう。春はすぐそこまできていた。

花壇には、早咲きのクロッカスがすでに茎を長く伸ばしている。残雪が溶け、冬の終わりを告げる長雨が続くようになって、ひよっとして冬は終わったのではないかと思えるほどに日が長くなっていった。空気はまだ冷たく感じたし、気の早いクロッカスのほかには何も息吹く気配はなかったものの、日差しが頬に当たった手のように暖かく感じられ、風に若葉が灰かに香ることもあった。

冬がもうすぐ終わり、春がくる。そして夏が来て、父のいない一年が過ぎる。時は最大の癒し手だと、人はいう。日が経つほどに、彼女の沈んだ心がいくらか慰められているのは確かだ。季節のおかげかもしれないし、センダーがこの世にいないことに慣れはじめたのかもしれない。玉座の間に入って、そこに父の姿を見なくても、もはや心に衝撃を受けることはなくなったし、〈評議会〉の会合で、かつて父の座っていた席に着いても、虚無感に襲われることもなくなった。だからといって平気になったわけではない——ああ、決して。けれど、ひと晩中ぐつぐつと眠れて、暗闇で目を覚まし涙で枕を濡らさなくなっただけでも十分だった。

ありがたいことに、ときには夢も見ずにぐつぐつと眠り、侍女に起こされて目を覚ますこともあった。オーサレンは、約束を果たした。直近の〈評議会〉で本題に入る前に、彼は出席者に対して個人的な見解を述べたいと申しでた。「厳密には、〈評議会〉で

話す内容ではありません。しかしながら、評議員にぜひ聞いていただきたい」

皆がセレネイを見た。同意して頷く。宮内庁官が議會の開会を宣言し、オーサレンに身振りで促した。

卓を囲む人々が無言のままオーサレンに注目すると、彼はわざとらしく咳払いをした。それが、あまりにも彼らしくない仕草だったので、議場の誰もが警戒心を抱き、神経を尖らせて耳を傾けた。

「お集まりの皆さん、我々は女王に対し、少しも緊急のない事案を無理に進めようとしていたと思うのです」彼はばつの悪そうな顔をしてそういった。

「つまり、女王に伴侶を直ちに選ぶよう要求していた件です。よくよく考えてみれば、我々はあまりにも性急だった」

セレネイは何もいわずに、頷きながら彼の発言を聞いていた。今は自分の意見を挟む時ではない。彼女はオーサレンに、彼自身の言葉ですべての評議員に説明して欲しかった。だが、ひとつだけ彼の言葉

に奇妙に思うところがあつた。ヴァルデマールの女王の話であるのに、伴侶というのはおかしい。女王が統治者であり、夫が〈使者〉でない場合には、配偶者が伝統的な名称ではないか？

彼女は実際にどの〈使者〉にも興味を示してこなかったが、それをオーサレンはあからさまにしたくないのかもしれない。もしも〈使者〉のなかに相応しい人物がいれば、彼女はすぐにも態度を明らかにしていただろう。事実、彼女の夫となる人は〈使者〉でない限り、王となり、共同統治者になることはできない。それにしても——候補者のなかに〈使者〉がひとりもないというのに、なぜ普通に配偶者とかわないのだろうか？

配偶者と王、どちらの可能性も残しておきたかつたのだろうか。

（ヴァルデマールに女王が即位していたのは、ずいぶん昔のこと。わたしの夫となる人が〈使者〉でなければ統治できないことを、皆が忘れていただけか

もしれないわ)

その事実を忘れていている評議員には、思いださせないほうがいいのかもしれない。

「すでに我々は理解しているはずです。女王は若い
が有能であり、さらに、助言と指導を必要とする時
を心得ておられる。女王には評議員を交代させる権
限が法的に認められているが、そうされなかった。

それはひとえに、女王のお父上が我々を信頼してく
ださっていたように、女王もまた我々を信頼してく
ださっているからでしょう。お父上の助言者であつ
た我々も有能であると認めてくださっているのだ
す」ざわめきが始まったところで、彼は再び咳払いを
した。「我々は損失を埋めようとするあまり、実際
には問題となっていない事案を解決しようとする騒いで
いたのかもありません」

セレネイは評議員席にいる〈使者〉たちと目配せ
を交わした。宮内庁官付きの〈使者〉キリル、エル
カース、そしてタラミールだ。

オーサレンはこの「罪の告白」でほかの評議員を
同罪にしたが、彼自身が過ちを認めたといいにはま
だ早い。

まるで彼女が問題の種であるかのように、彼らは
騒ぎ立てていたので。そのような兆候も見られない
うちから！

オーサレンは三度咳払いをすると口重に話した。
た。彼女は固唾を呑んだ。いよいよ彼は自身の非を
認めるのだろうか？

「さらに、我々が相応しい候補者を必死に探し回る
さまは、近隣国に対して、我が国が弱体化している
との印象を与えかねません。これでは女王のお父上
の前で發揮していた我々自身の能力も、女王の能力
も信用していないかのようにありませんか。我々
は羊飼いを失って不安気に彷徨う羊の群れのような
印象さえ与えかねない。ご承知の通り、我が国の周
辺には狼おおかみがうろついているのです」

またもやざわめきが起こる。セレネイは、自分の

主張をオーサレンが多用しているのを聞いて、含み笑いをした。(認めた。わたしが正しいと認めたわ。個人的にしか謝罪を受けていないけれど、とうとう皆の前でわたしが正しいと認めたわ) 勝ち誇った気分ではあったが、それだけで満足する気はなかった。「そのような結婚を——少なくとも婚約の話を進めようと、もつとも積極的に関わっていたのはわたし自身だと十分に心得ております。しかしながら、皆さんも今後はこの話題に触れることはお控え願いたい」そういつて、気まずそうに肩をすくめた。彼のように恥じらった様子の評議員は少なくなかった。「オーサレン殿、あなたがそうおっしゃるのなら」ガーゼサー卿が躊躇いがちに切りだした。「国外の情勢については、我々よりもあなたの方がよくご存じだ」

「従っていただくのが最善の道でしょうな」オーサレンが答える。あとは『わたしが間違っていた』といいさえすれば完璧だ。

だが、彼はすぐに話を先に進めて、失った面目を取り戻そうとした。「いづれにせよ、女王が未婚であるとはつきりさせておくことも、我々の利益になり得るでしょう。重要な関係国には、あらゆる地位の未婚の若者が——王子さえ——いるのです。それらの国の統治者は、もつとも緊密な絆を結ぶことによつて、ヴァルデマールと協力関係を築く方法があると気づくにちがいありません。さあ、しばらくこの件は保留にするとして、この王国の抱える問題に取りかかろうではありませんか」

卓を囲む全員が頷いたものの、幾人かはまだ内心渋っている様子だった——古参の評議員たちが、女王^クでは力不足だと考えるのは当然だ。そのうえ、若い^クのだから。彼らは彼女ひとりに統治を任せるつもりなど微塵もない。

(時が解決してくれる) 彼女は判断した。(——もしくは、評議員を入れ替えるか) たとえば〈詩人〉や〈治療者〉の代表者を辞め

させても差しつかえないだろう。それに、《評議會》にもっと女性を参加させるべきかもしれない。(仕事で成功を収めた女性ならば、わたしのことを、導く必要のある者ではなく、指導者とみなしてくれるかもしれない)新しい席をひとつかふたつ用意するべきだろうか。新興の組合から誰かを入れるか？親の遺産を引き継いだ者ではなく、自身で富を築いた者が多いほうが、実際の役に立つだろう。

セレネイが考え事をしているあいだに、オーサレンは呉服商組合と機織り商組合との諍いに話を移していた。彼女は状況を把握しようと急いで注意を戻した。ぼんやりと考え事をしている姿を晒して、オーサレンに説明をやり直させるのはまずい。気づけば数名の評議員が、自ら発言する前に彼女の意見を聞こうと待ち構えている。歓迎すべき変化だ。

会議はその後と同様の雰囲気の中で進行していった。彼女が当然受けるべき敬意を得るのにオーサレンの「承認」が必要だったことは少々腹立たしいが、

ともかく今は、敬意を払われている。たとえ一時的なものであったとしても、ひとたび手にしたならば、取り戻すのはずっと容易だろう。

会合が終わると、彼女はお付きの護衛と侍女とともに居室へ戻りながら、再び別の考えごとに耽りはじめた。オーサレンが言及していた、外国の王子——それが彼女の心に響いた。彼が先日の晚餐で最初に口にしたときから、気になってしかたがなかったのだ。

(外国の王子って?)今までそのような可能性があるとの心配すらなかった。外国から来た使節が自国の王子を紹介したこともなければ、大使を通じて問い合わせを受けたこともない。

もしかすると、喪が明けるのを待っていたのかもしれない。実際、そうするのが礼儀だろう。

(そんなおとぎ話に出てきそうな人が仮にいたとしたら)彼女は自分の居室に入りながら独りつぶやいた。衛兵が扉の外の持ち場に着く。

いいえ、あながち、おとぎ話でもないのかもしれない——。

とはいえ、そのような若者が結婚もせずうろついていたら気づくはずだ。確かに、ヴァルデマール国外の高貴な家系に関する彼女の知識は不十分だった。唯一、ハードーン国の王について話を聞いてくるくらいで、しかも国王は一年ほど前に、自身の宮廷にいた淑やかな若い娘と結婚したばかりだ。

(でも、候補者がいないのに、オーサレンが二度も示唆するなんてありえるかしら?)

それなら、実際にどんな王子がいるというのだろうか? セレネイはお付きの侍女を下がらせ、女中が暑い湯を準備しているあいだに夕食で着る長衣を選んだ。

シン「エイ」インに王子がいるのだろうか? そういった話を聞いた覚えはなかった。(ねえカリヨ、シン「エイ」インには王子のような地位の人がいるの?)

(聞いたことがないね) カリヨは意外な質問に驚いた様子で答えた。(王や王子といった位はないと思うよ。(一族)の集まりなのだと思う)

そう聞いても、セレネイはぴんとこなかったのだが、おそらく(一族)の長が王子の役目を果たすほど大きな集団もあるのだろう。実際、シン「エイ」インは大勢いる。だとすれば——面白くなりそうだ。彼女は女中を追い払い、用意された湯に入った。

ラヴェンダーの香りが漂う熱い湯に浸かって寛きながら、空想に耽る。強くて野性的な戦士が、漆黒の髪を腰まで垂らし、黒い羽と革装束で着飾って、髪と同じくらい黒い馬——もちろん、鞍はつけていない——に跨って、ヘイヴンへ乗りこんでくるのだ。一緒に走ったら、どんなに素晴らしい絵になるだろう。彼女は純白のカリヨに、彼は闇夜のように黒い軍馬に跨って……。

彼女は空想を振り払った。あまりに馬鹿げている。シン「エイ」インの遊牧民が(平原)を離れること

などありうるだろうか？ まして、外国の文明生活を送る女王と結婚するために？ とても考えられない。

たとえ彼女を求めてここまで来たとしても、留まることはないだろう。シン・エイ・インが長期にわたつて〈平原〉を離れることはないし、彼女自身もヴァルデマールをめつたに離れられない。

それに、ヴァルデマールの女王と結婚したところで、シン・エイ・インが得することはあるだろうか？ 〈平原〉からヴァルデマールまでは遠く、同盟を結ぶ利点はない。駄目だ、駄目だ——こんな期待を抱いたところで、簡単に打ち砕かれてしまう。

それならほかに誰がいる？ レスウエラン？ レスウエランに未婚の王子がいるのだろうか？ いるとすれば、少なくともヴァルデマールとは国境を接しているのだから、交易上の利益を得るといふ点でこのような縁組は有利に働くだろう。

メンミスは？ メンミスはレスウエランの公

国だ。だが、統治している一族について、彼女は何かとつ思いだせなかった。

もちろん、カースはだめだ——。

名前しか知らない、ジュカサやシージェイといったはるか遠くの国はどうだろう？ あり得ない。ヴァルデマールとの交易すらない。迷える小君主がどうしたらここに辿り着くことができるだろう？

ほかに彼女の知らない国があるかもしれない。北方では——イフテルは問題外だ。特別に優遇を受けしている少数の交易商以外は国境を越えたことがないし、その交易商たちは固く口を閉ざしている。

湯が冷めてきた。誰かが入ってきて体を布で擦りはじめの前に出てしまおう。十四年以上ものあいだ、ひとりで風呂に入ってきたというのに、今になってひとりで風呂に入れないかのように尽くされる女王とは、いったい何なのだろう？

だが、浴槽から出たときの水しぶきの音がある種の合図となつてしまったようで、侍女たちがタオル

や長衣、香水、化粧水を持って群がってきた。仕方がないので今回ばかりは世話を焼かせたまま、考えに耽けることにした。

侍女たちに部屋着の長衣をきつちり着せられ、続いて髪をせっせと梳かされる。そのあいだにも、あれこれと考え続けた。

北方は、イフテル国があるほかは、〈悲しみの森〉のあたりに野蛮人がいるだけだ。むろん、彼らは論外だ。脂ぎって、獐猛で、毛皮に身を包んだ獣だ。〈評議会〉が提案した八十過ぎの老人よりもひどく不快に思えた。

西方に相応しい王国があっただろうか？ ペラジリスの森のあたりか、その先に？ 可能性はある。そこには半分伝説と化している〈鷹の兄弟〉のほかにも生活している人々がいて、村人たちは〈鷹の兄弟〉の保護を当てにして暮らしている。つまり、西にはそういった村の属する王国があるのかもしれない。それでもやはり——ヴァルデマールと同盟を結

ぶことに利点があるだろうか？ 何も思い当たらない。

ほかの王国には、ヴァルデマールの大公爵と同じように、王子としての権力を有する地位があるのだろうか？ あってもおかしくない。だが、彼女には調べる時間がなかった。

そのような地位があるならば、長子ではない王子が他国の女王と結婚するのは、たとえ統治権のない配偶者となるにしても、この上ない名誉であり、利点も多いだろう。それに、王子本人が統治者になれなくても、その子どもは〈選ばれ〉て統治者になれるかもしれない。さらに、王家の一族と特別な協定を結ぶ可能性もあるのだから、それだけでも結婚の利点としては十分なはずだ。

王族と王族が結婚するのと、王族が下位の者と結婚するのでは、大きな違いがある。利益を得るのは、ほとんどが位の低いほうの側だ。

（大使や貿易特使の書簡記録を見れば、何かわか

るだろうよ)カリヨが助け船をだした。(もしくは、宮内庁官付きの(使者)キリルに、どうやって調べればいいのか聞いてみるといい。国外からの求婚者が続々と現れるというなら、誰かが知っているだろうからね)

外国の王子——しかも、ひとりではないかもしれない。そう考えて、彼女は密かに興奮を覚えて落ちつかない気分になった。これまでに紹介された候補者に劣らずあり得ない人物であったり、不快に思う相手だったりするかもしれないが、それでも——会ったことのない類の人物であるのは確かだ。

候補者となるのは、思春期の少年よりも年齢が上で、白髪の老人よりも若い。美男子の可能性だつてある——怪物でさえなければ、彼女はそれほど外見を気にしないのだが。彼女の知らない、予想もできない人物。まったく目新しい流儀と習慣に生きる人——。たとえ結婚したいと思わなくても、そのような人物が(宮廷)にいるのは面白いだろう。

いいや、面白いどころではない——なんて魅力的なのだろう! 彼女は舌舐りをした。侍女が髪をぐいと引つ張ったことにすら気づかなかつた。

(期待しすぎてはだめ)彼女は自分にいいきかせた。(そんなことは起こりそうもないもの。いたとしても、老人に決まっている。もしくは、よほどの愚か者か。でなければ、すでに結婚しているか)

そのとき、自分が間一髪で危機から逃れていたのだと気づいて、彼女は身を震わせた。もしもアレックスンダール王が愛しの若い娘と結婚していなかつたら、もしも彼がひとり身だつたら——。

彼の宮廷にいくら可愛らしい若い娘がいようと、彼女に結婚を申しこむ機会をみすみす逃さなかつただろう。さらに、彼の求婚を彼女が断ることを(評議会)は決して認めなかつたはずだ。ハードーンとヴァアルデマールは古くからの同盟国で、過去にはハードーンへ(使者)が救援にむかつたことすらある。(使者)ヴァニエルですらそうして、(魔物殺し)の

名を得たのだ。王の申し出を丁重に断る理由など見つけられなかつただろう。

ああ、本当に、危ないところだった！

彼女は突然、確かなところを知らずにはいられなくなつた。国外から求婚者がくる可能性は本来にあるのだろうか。

(知りたい。アレツサンダールが未婚になつたような人物が、わたしの喪が明けるのを待っているのかどうか、どうしても知りたい——)

あの人に聞くのがいいだろう。いくら物知りだからといって、(使者)キリルではだめだ。聞くべきは、オーサレン。そもそも、彼がこの話を持ちだしたのだから。彼女の〈評議會〉に外交官のような役職があつたとしたら、彼こそが適任者だ。ヴァルデマー、ル国外の知識にかけては、彼女の曖昧さに反比例するように正確に知っている。

(外国の王子……) 容易に白昼夢に浸れてしまう。注意が散漫になつたとしても、誰にも気づかれずに

済む安全な自室にいてよかつた。

侍女たちが彼女の身支度を終えたので、ひとりオーサレンからの手紙を携えてきた者を除いて部屋から追いだした。〈宮廷〉での晚餐が終わつたら、この件についてきつと話すことになるだろう。

✠ ✠

アルベリツヒは、夕食後に人を招いていた。少々残念な気持ちで、ミステをこの場に呼んで情報を共有するには反対した。この「集まり」に呼ぶのは〈君王補佐〉ひとりであるべきだ。

タラミールは、今回ばかりは非常に気を張つて今この場に存在し、ミステが盗んできた書類に目を通していた。

アルベリツヒは書類を鍛錬場の外に持ちださなかつた。それどころか、目の届かないところに置くともしなかつた。関係するすべての人にとって幸いなことに、タラミールは何の問題もなく動きまわることができるとは、儂い雰囲気ではあつたが。

タラミールの経験したことをすべて乗り越えるのは、人間にとつてあまりに苛酷だ——死にかけて、再びこの世に引き戻されるのは、想像を絶するほど残酷な経験だったに違いない。タラミールの年齢では、なおさらだつたらう。あのようなことがあつたあとで、今でも彼がある程度正気を保つていられることに、アルベリツヒは未だに驚きを覚えていた。ある意味、人々の期待以上に、彼はよくやつていた。(そつだ、彼は虚弱なのではなく、儂いのだ) カンターが同意した。(半分は精神的なものだと思つ) 彼が全神経を集中させるべき事態が起きた場合は別だ。そのときには、昔のタラミールに戻つた。アルベリツヒの部屋の戸口に付添い人なしで現れたのは、昔のタラミールだつた。隙のない、機知と策略に長けた、タラミールだ。

彼はアルベリツヒの話を最後まで聞くと、慎重に書類に目を通しはじめた。アルベリツヒは心から願つた。自分には何かおかしなことが起きているとし

かわからなくても——タラミールなら暗号を認識し、少しなら読めるのではないかと。

見込みが薄いのはわかっている。だが、カースの〈士官学校〉では、暗号や秘密の伝言についての訓練を受けなかつたし、彼がいつも取引をしている〈逃亡者の門〉近辺の卑しい巢窟の住人は、ほとんど読み書きができない。奴らに暗号を扱うように頼むのは、豚に綱の上で踊れというようなものだ。

「ふむ」〈女王補佐〉は丁寧(ていねい)に書類を卓に置いた。「この書類を読めるほど暗号に精通しているわけではないが、検討すべきであるのは確かだ。ヴァルデマー語で書かれてない可能性もあるな」

(くそ！ やはりな)

「実際」アルベリツヒはひどく落胆していった。「ヴァルデマー語ではないのだろう。ほかの国の者に向けて書かれたとするなら、その国の言葉であるはずだ。その可能性はある」

「つまり、解くべき謎はふたつだ。この暗号の内容

と、これが何語で書かれているか。それでも——」
 タラミールは人差し指を自分の上唇うわくちびるに置くと、ぼんやりとした目でじつと考えに耽たつた。「大きな進展であることに変わりないぞ。誰かがこの過激な男に暗号で情報を送らせようとしているのだから、組合の極秘情報や、愛人からの伝言でないのは確かだ。専門家に託たくすのがよかろう」

「できれば、原本はおれの手元に置いておきたい」
 タラミールがどのような反応を示すだろうと思いつつ、アルベリッヒはきりだした。「大事な証拠だ」

「ああ、いいとも！」原本をどこに置くかなど問題にもならないとでもいうように、タラミールはそつげなく手を振った。「むしろ、きみにはそうしてもらいたいところだ。ミステに写しを取らせて、それを——」躊躇ちゅうちゆいがちに言葉を続ける。「なあ、許してくれ。暗号を趣味にしている仲間がいて、以前からこのような問題に対処しているとしかいえないのだ。ちよつと変わっているが、まじめで正直者だ。

それが誰なのかを知ったら、おそらくきみは驚くだろう。差しつかえなければ、名前は伏せておきたい」
 「明かさないうが、そいつの身のためだろう」アルベリッヒが同意した。「二者のあいだでは秘密でも、三者が入ると危険になる。そしてしばしば、三人以上に知れるものだ」

タラミールが頷く。敢あえて断らずとも、アルベリッヒならば理解してくれると確信していたようだった。

「さらにいわせてもらえば、ミステをあ役者たちから引き離れたほうがより安全だろうな」タラミールがいった。「わたしにしろ、きみにしろ、彼女を説得できるかどうかは別として」

「あんたのいうとおりだ」アルベリッヒはため息をついた。すでに数燭しよく時じもかけて彼女を説得し続けていたのだ。

『わたしが突然いなくなったら、みんな怪あやしむわ。それに、ノリスを尾行して、誰と会っているか探る

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。